

## 関東以西の水田の問題雑草 ヒレタゴボウ

協友アグリ株式会社  
普及営業部  
徐 錫元

近年、関東以西の水田で問題化している雑草に外来雑草のヒレタゴボウ(図-1, *Ludwigia decurrens* W.)がある。別名、アメリカミズキンバイ。ヒレタゴボウは熱帯アメリカ原産で、アカバナ科チョウジタデ属の一年生草本であり、在来種のチョウジタデに類似している。日本国内では1955年に愛媛県松山市で見いだされ(清水ら2001)、1960年代には四国や瀬戸内海で水田雑草として知られるようになった。現在では、関東以西で見られている。

### (1) ヒレタゴボウの形態的特徴

茎は四稜を持ち断面は四角形で直立し、よく分岐する。高さは1m以上になる。葉は、広線形で先端が細くのび、無柄で互生し基部は茎に流れて稜につながって翼となる(図-2, 清水ら2001)。夏季に直径が3cm程度の4弁化を葉腋につける。果実は円筒状で、高さ2cm程度、上端に4枚のガク片が残る。中には0.5mm程度の小さな種子が数多く形成される。なお、成植物では土中よりほぼ垂直に浮根が発生する(徐2017)。

### (2) 水田およびその周辺部での発生

一般的に、ヒレタゴボウは移植後、十分に湛水深がある間はほとんど発生してこないが、田面が露出する中干し期になると発生してくる。また、湛水圃場であっても、浅水の場合や、田面が高く露出した部分でも発生が見られる(図-3)。発生当初は、水稻に隠れ気がつかないが、出穂期頃には水稻よりも大きくなり目立つ(図-4)。

また、その発生は収穫後の刈跡でも見られる。さらには水稻の生育期間中には発生は見られなくても、秋の耕起後に圃場一面に発生し、赤く変色することもある(図-5)。水田畦畔での発生も多い。なお、畑地状の畦畔では、浮根は発生し



図-1 開花中のヒレタゴボウ  
(2015年9月上旬, 岡山市)



図-2 葉の基部(2015年9月上旬, 岡山市)  
注) 基部は茎に流れて稜につながって翼(鱗)となっている。



図-3 田面が露出した部分でのヒレタゴボウの発生  
(2017年8月上旬, 愛知県稲沢市)



図-4 水稻登熟期のヒレタゴボウ多発圃場  
(2009年9月中旬, 愛知県豊田市)



図-5 イネ刈跡の耕起後の圃場一面に発生したヒレタゴボウ(2016年11月下旬, 愛知県稲沢市)  
注) 茎葉部は赤く変色。一部、開花中。

ない(徐2017)。

### (3) 水田での防除

中干し期頃から発生が始まるため、ヒレタゴボウに活性を有する一発処理剤だけでは除草効果が切れる可能性がある。このため、初期剤との体系処理や、発生後はベンタゾン等の中後期剤との体系処理が効果的である。また、大きくなった個体は、水稻収穫前に抜き取る。上述したように、ヒレタゴボウの発生の大きな要因は、田面が露出し畑地状になることであるので、圃場の水管理も重要である。

#### 引用文献

徐 錫元 2017. 田畑共通広葉雑草に見る茎下部からの不定根発生—水田における生育のための適応反応—. 植調 50 (10), 1-4, 27-28.  
清水矩宏ら 2001. 「日本帰化植物写真図鑑」. 全国農村教育協会, 東京, pp.206.